

記憶の共有による風景の継承 -オーラルヒストリーを手法として-

岡本 章大¹・吉武 舞²・川添 善行³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
(〒158-8505 東京都目黒区駒場4-6-1 E-mail:a-okmt@iis.u-tokyo.ac.jp)

²非会員 東京大学大学生産技術研究所
(〒158-8505 東京都目黒区駒場 4-6-1 E-mail:mystk@iis.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 東京大学大学生産技術研究所
(〒158-8505 東京都目黒区駒場 4-6-1 E-mail:kawazoe@iis.u-tokyo.ac.jp)

本研究では町の記憶の共有を目的に、まちづくりオーラル・ヒストリーの実践として、大分県竹田市にて住民の記憶の調査を行った。昭和30年～50年の竹田の風景を、オーラルヒストリーという手法を用いて調査した。高齢者の方々の頭の中だけにあった風景を、一枚の壁絵として描き出すという独自の表現を用いて、他世代に共有できるようにした。

キーワード：オーラルヒストリー、竹田市、インタビュー、地域の歴史

1. はじめに

(1) 背景

オーラルヒストリー（口述史記録）は、文献資料から得られない情報をインタビューによって聞き取り、記録としてまとめる研究手法である。オーラルヒストリーは歴史学、政治学、経営学、建築の分野でも広く用いられており、特に1999年から後藤¹⁾²⁾をはじめとして「まちづくりオーラル・ヒストリー」と称し、まちづくりの手法として実践され、その有効性が明らかにされている。しかし、まちづくりの手法として実践例は少ない。

本研究の調査対象地は大分県竹田市の城下町地区である。竹田市は1594年より岡藩の城下町として整備³⁾され、特に城下町地区ではその特色を色濃く残している。竹田市の高齢化率は39.3%、全国2位（H23.9.1現在）である。地域の記憶を知る世代の高齢化、そしてそれを受け継ぐべき若い世代の人口が減少している。地域の記憶の断絶という状況下で、地域の歴史を伝えていくためにオーラルヒストリーという手法は有効であり、また、新たなまちづくりの担い手たちの協力や意識共有が得やすい城下町地区という対象地で調査研究を展開することで、今後のまちづくり議論の発展に寄与し、世代間の結びつきを再構築することができるかと予想される。

(2) 目的

竹田城下町が最も賑やかだったとされる昭和30～50年を中心に、風景、暮らしなどの地域の歴史について、

口述記録を中心に情報収集、整理、分析をおこない、そのプロセスとアウトプットを、これからまちづくりを担っていく人々と共有する。本研究ではオーラルヒストリーのまちづくりへの実践可能性と方法論について、特に住民の参加意識に着目し、考察することを目的とする。

(3) 手法

a) オーラルヒストリーについて

資料としての口述の収集、整理と合わせ、本研究では、その調査およびアウトプットの過程で、意識的に地域の人が関わりを持つための工夫を試みた。それは、世代間で受け継がれるべき記憶を、第三者である我々が記録するだけではなく、本来の受け手である地域の若者、また地域外からの新規移住者など、まちづくりの新たな担い手の方々に共有、共感してもらうためである。

b) 本研究の位置づけ

既往研究におけるオーラルヒストリーと、本研究によるオーラルヒストリーの、フローを比較する。両調査のフローを、図-1に示すように【現地調査】・【編集・企画】・【活用】の3つの段階に分け、それぞれの段階での活動内容の差異を分析する。

既往研究では、口述史調査をし、編集・アウトプットを行い、まちづくりに活用する、という一連のプロセスが独立している。そのため、ヒアリングとアウトプットの間に若干の時差が生まれる。本研究ではヒアリング、編集、アウトプットを一部同時並行して行い、それぞれに関わる人たちを有機的に結びつけることを目指した。

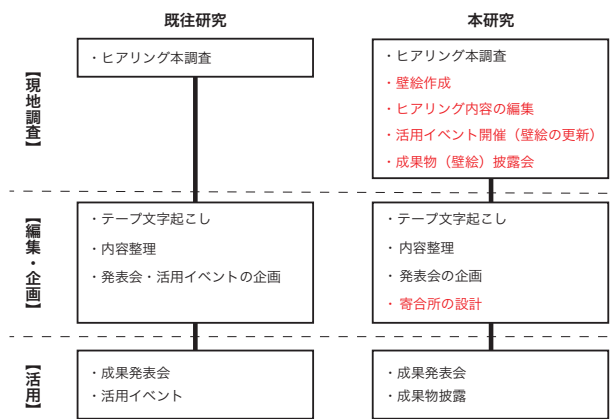


図-1 フロー比較

2. 調査概要

(1) 調査日程

現地でのヒアリング調査は、2012年10月3～21日に行った。同時期に地域文化と現代アートをテーマとして「TAKETA ART CULTURE」というアートプロジェクトが開催された。本研究では、このイベントの一貫としてヒアリング調査を行うことで、地域のまちづくりとの積極的な関わりが期待できると考え、「壁絵-城下町ができるまで-」という題目でイベントに参加した。

(2) 事前準備

城下町地区の店舗の倉庫をヒアリング空間に改修した。10月上旬に設計を行い、自分たちの手で施工をした。改修に当たり、工務店の方から助言を受けるなど、地元住民の協力を得ながら作業を進めた。既存の壁を塗装し、既存モルタルの上に床を増設した。また、建具を外して開放し、家具を半分屋外に置くことで地域の縁側として利用されることを意図した。

ヒアリング空間には、ヒアリング対象者がより昔の情報を思い出しやすいように、歴史年表、城下町壁絵、その他地域資料の3点を作成・用意した。また定点カメラを設置し、更新される壁絵の様子を記録した。



写真-1 ヒアリング空間

a) 歴史年表

主に竹田市城下町地区に関する情報⁴⁾を抜粋してまとめた。写真を多用し、大きく壁に貼り出すことで直感的に昔のことを思い出しやすいようにした。

b) 城下町壁絵

壁には城下町全体を俯瞰で描いた壁絵を用意して、壁を見ながら昔を思い出せることを目的とした。

c) その他地域資料

より正確な情報が得られるように、「竹蔵」⁴⁾をはじめとして、市報、歴史書物など、ヒアリング対象者が記憶を思い出すきっかけになるものを何点か用意した。

(3) オーラルヒストリーの実践

オーラルヒストリーの本調査のヒアリング概要を、表-1にまとめる。

竹田にもっとも活気があったと言われる昭和30～50年の店舗の場所や変遷などを中心に掘り起こしつつ、自由に話をしてもらい、本人が竹田のどのような部分に関心があるのかを聞き出した。

ヒアリングで得られた情報はその場でトレーシングペーパーに書き込み、壁絵にプロットし、次のヒアリングまでに共有できる状態にした。

ヒアリングの際には定点カメラやボイスレコーダーを用意し、ヒアリングの音声や光景をできるだけ記録した。昭和39年の城下町地区の住宅地図をA3サイズで用意し、ヒアリング中に情報を書き込んだ。

表-1 ヒアリング概要

質問の年代	・昭和30～50年
質問の主軸	・店舗や工房、町並みの変遷 ・自身の生い立ちと竹田の関わり ・商業、生業について ・暮らし全般について ・今と昔で変わらない竹田の魅力
記録の方法	・写真撮影 ・音声記録 ・壁絵に書き込み ・住宅地図に書き込み



写真-2 ヒアリング風景

(4) 成果物「城下町壁絵」

ヒアリング会場の壁一面に描いた城下町壁絵に、聞き出した情報をプロットした。情報は整理した後、透明なポリカーボネート板に手書きで記入した。人の多さや建物の様子など、絵にできる情報は絵にした。絵にできない情報は文字情報にし、該当箇所がわかるようにレイアウトした。プロットには地元住民、特に竹田高校生に参加を呼びかけ、その過程で高校生たちに昔の城下町の様子を知ってもらうことができた。



写真3 城下町壁絵 (完成)

3. ヒアリング調査結果と編集

ヒアリング対象者の情報を、表-2 にまとめる。ヒアリング内容の音声データは全て文字起こしをした。誤字や聞き取れない部分の校正は、参考資料を活用しながら行った。総計して、27時間の音声データ、257272字の文字起こしに及ぶ資料になった。

(1) キーワードによる抽出・整理

文字起こししたデータから、場所や環境とそこでの人の活動の様子に結びついたエピソードを抽出し、表-4 にまとめる。表-4で主に出てくる場所は図-2 に示す。

エピソード数に関して、「道」「建物」での「商業・生業・暮らし」のエピソードが多く、「竹田周辺」でのエピソードは少なかった。エピソードがある人も城下町地区外出身の人が多い。「近所で何でもすませていた」「駅まで行くのは遠征だった」という発言もあったように生活範囲は現在よりも狭かったことがわかる。

「場所・環境」の内容に関して、「水・川」では子どもの遊び場だけでなく、「井戸の水で焼酎をつくっていた」や「釣った魚を焼いて売っていた」など生業とも密接に関わっていたことがわかる。「道」では遊び場やイベント会場としてだけでなく、働く人が往来する姿が見える場所でもあった。「オート三輪」や「宣伝カー」、「配達員の自転車」等、当時の交通の様子や、「忙しいといいながら立ち話」「朝3時から店の物音や仕込みの匂

表-2 ヒアリングリスト

番号	日程	名前	生まれ年	性別	出身
1	10/10	A	1937	M	魚町
2	10/11	B	1937	M	下本町
3	10/12	B(2回目)	1937	M	下本町
4	10/12	A(2回目)	1937	M	魚町
5	10/12	C	1952	F	下本町
6	10/12	D	1949	M	会々
7	10/13	E	1946	F	下町
8	10/13	F	1928	M	本町
9	10/13	A(3回目)	1937	M	魚町
10	10/13	G	1949	F	田町
11	10/14	H/I/J	—	F/F/F	—
12	10/14	K/L	1943/1941	M/M	城下町外/狭田
13	10/15	M	1932	F	田町
14	10/15	N	1945	M	溝川
15	10/16	M(2回目)	1932	F	田町
16	10/17	O	1938	M	殿町
17	10/18	B(3回目)	1937	M	下本町
18	10/18	P	1951	M	本町
19	10/18	Q	1930	M	古町
20	10/18	R	1936	F	城下町外
21	10/18	S	1948	M	上町

い」等、賑やかな道の様子が伺える。「建物」では「夜は先生の家に遊びにいった」「テレビのある家に集まった」「知らないアパートで隠れんぼ」のように他人の家に自由に入出入りする様子から現在よりも緩やかなプライバシーのあり方が想像される。公民館が「ダンスパーティ」「歌謡ショー」等の文化的なイベントの会場として記憶されている。「山・神社」は子どもの頃の遊び場や、祭りやイベントの祭によく利用されていたことがわかる。

「人の活動」の内容に関して、「遊び」では、子どもの頃は場所に関係なく、城下町全体をフィールドとして遊んでいたことがわかる。その一方で「お宮ごとのコミュニティがあった」「他所に石を投げに行った」など、子供社会でも人間関係には領域があったということもわかる。大人の世界では「仕事が忙しく休んでも半日」と今のように余暇を楽しむ様子はなく、主に飲み屋での思い出が多い。「商売・生業・暮らし」では「猪が寝ていた」「蹄鉄をつくっているのを見に行った」「チンドン屋がいた」等、当時の生活の様子が道にあふれ出ていたことがわかる。飲み屋の多い通り、魚屋の多い通り、アーケードのある通り等、通り毎に特徴があったことがわかる。また「高校生の下宿」「内風呂の無い家と銭湯」「家の中をトロッコが走っていた」など、当時の生活様式に合わせた建物があったことが伺える。「イベント・祭り・事件」では、特に祭りに関するエピソードが多く、「子供が一晩中起きていても怒られなかった」等、祭りは日常ではできないことができた特別な日だった。

表-4 ヒアリング内容分類

		場所・環境		建物		山・神社		竹田周辺			
		水・川		道		建物		山・神社			
遊び (子ども)	岩のくぼみの淵池でへたくそは遊んだ/5/C/ 上級者は泳み橋から飛び込んだ/5/C/ 夏は川、冬は山で遊んだ/6/D/ 夏比寿屋の子どもで釣り/14/N/ まらちの氷路でうなぎを釣った/16/O/	遊学途中の天ぷら買い/中学校付近/14/N/ ハラフと命が通った/橋/14/N/ 一文まんじゅう/ほぎき/14/N/ 自走車のタイヤを転がして遊んだ/14/N/ 子どもの家がめだつた/16/O/	知らないアパートでかくれんぼ/11/A/ かくれんぼ中に火事を知った/11/A/ 熊手倉系、おぼろで映画、命がけ/4/A/ 子どもがよく集まっていた/ほぎき/5/C/ 屋根や感度の理髪店に遊んでいた/5/C/ パティシエをしていて/商工会議所下/7/E/ 演劇でエロ映画を友達と見た/8/F/ 酒場でエロ映画を友達と見た/8/F/ 製材所で遊ぶ、おがくすの山/14/N/ 小学校の図書館で花札遊んだ/12/K/L/ 夜は先生の歌に遊びに行った/19/O/ 蒸気機関車とクレーンを見に行った/駅/21/O/ 裁判所で働くまで遊んだ/21/O/ 蔵の中で読書/NTT前/21/O/ 初めてのテレビに全員集まった/21/O/ 夏、屋上でビアガーデン/ニュー竹田/4/A/ 飲み屋(ようたん、スイスetc.)/17/B/ 竹田クラブで毎週の洗濯/田町/19/O/ 池を埋め立てた映画館/現NTT/2/B/	子どもはどこで遊んでも怒られた/4/A/ 雨降れ傘をつくって陣取り合戦/5/C/ 肝試しなどをして遊んだ/防空壕/5/C/ 夏は川、冬は山で遊んだ/6/D/ 竹の刀を持って行って/山の上/8/F/ 山の中に小屋、敵がせめてくる遊び/14/N/ 肝試し、護守がいた、火の玉/火葬場/14/N/ 神社ごとに遊ぶ、池に船/西宮神社/18/P/ 知照りで面白かったのは玉覚寺/21/O/ 瀧山の岩山で弁当/21/O/	たまたまの休みと隣どりをや久住高橋/17/B/	1	11	1	4		
遊び (大人)	1	9	20	11	1	4					
商売 生業	1	5	9	20	11	4					
くらし	1	5	9	20	11	4					
人の活動	1	5	9	20	11	4					
祭り イベント 事件	川で水死事故が起きた/7/E/ 特別水路(掛け道)でなくなった人/16/O/	近郊から多くの人/夏祭り/3/B/ 城原から神輿、引き籠り/夏越祭り/駅前/10/G/ 七夕まつり/21/O/ ヌードダンサーを呼んだ/8/F/ 映画のロケのバックコーラス/12/K/L/ アメリカのジープからジョコレート/14/N/ アメリカの車/18/P/ 配達の自転車(佐藤カララガ事件)/19/O/ 夜市、宇津のレース/21/O/ 葬式の後、駅から馬で死体を運ぶ/14/N/ 泥棒逮捕/変形交差点/18/P/	お祭りでお金をとる店が増えたら/8/F/ お祭りになるお祭り参加できず家にいた/14/N/ 映画上映、歌謡ショー/公民館/2/B/6/D/ ダンスパーティーを開いた/公民館/4/A/ 中学校卒業生で映画を見に行く日/7/E/ 皇太子がきた/岩城屋/18/P/ 家の倉庫に保管した神輿の飾蓋られた/18/P/	神輿の飾取り争い/夏越祭り/14/N/ 他所に石なげ/夏越祭り/14/N/16/Q/ 神輿の格差、古町本町は豪華/夏越祭り/21/O/ 運動会はお宮対抗で行われた/5/C/ お祭りでも一文まんじゅうが食べられた/10/G/ 初詣の行列/藤井神社/18/P/	1	24	26	7	11	6	0

※エピソード/場所/ヒアリング回/話者/
※右下の□内の数字は、エピソードの数を表す
※○は書らしが建物に生活様式が結びつき強いことが伺えるエピソード

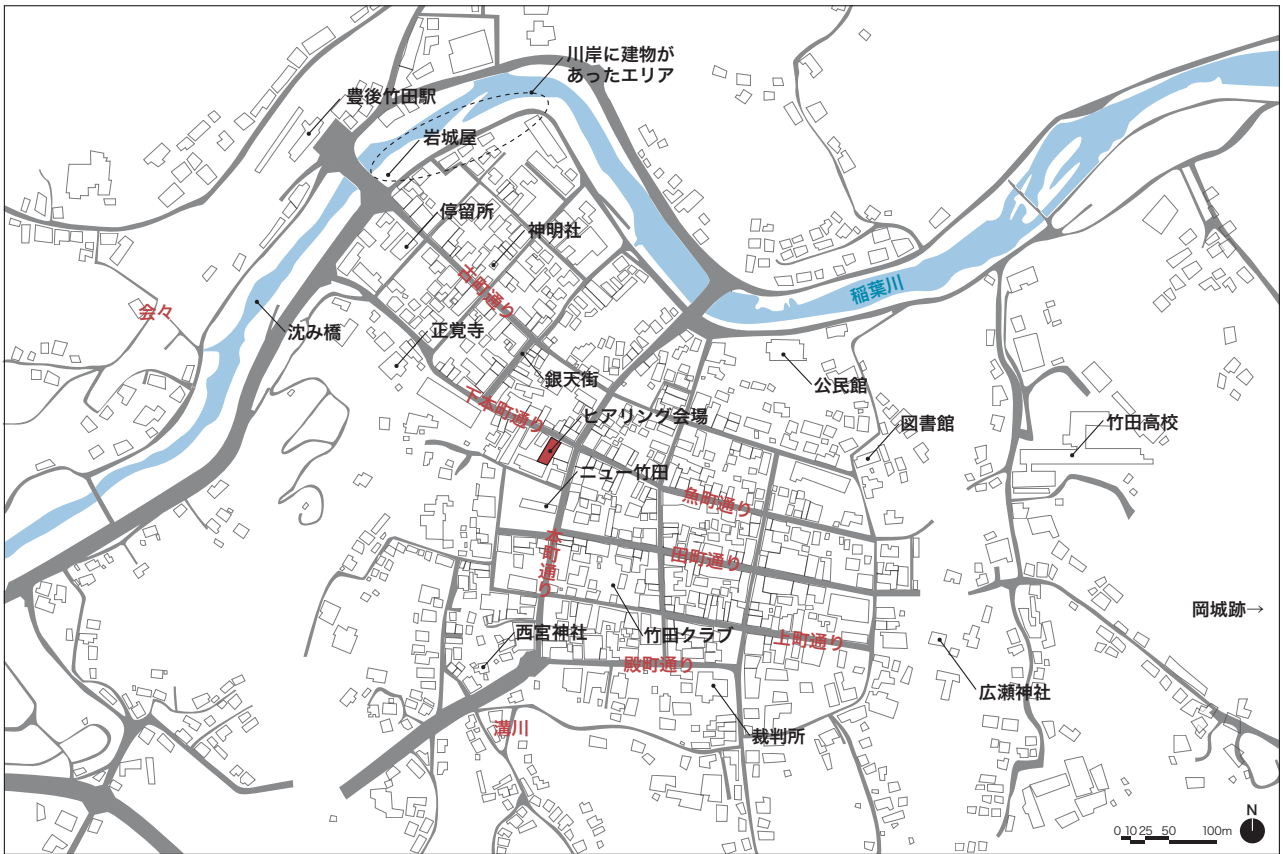


図-2 竹田城下町地区地図 (現存しない建物は、当時の位置を指す)

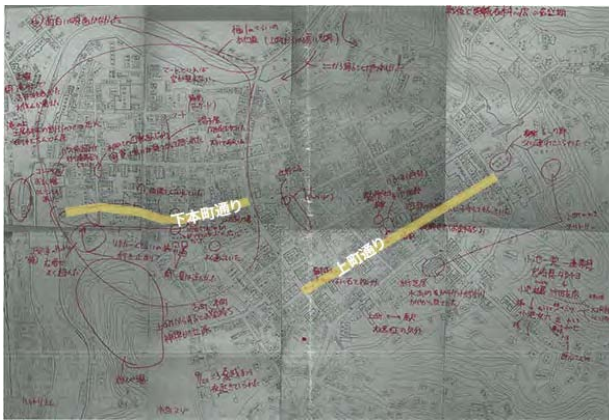


写真4 Sさんのマッピング例

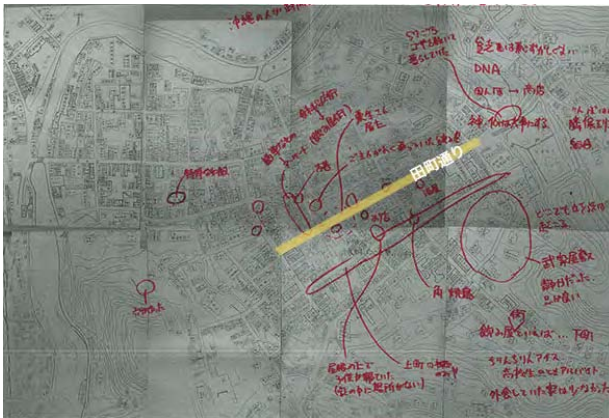


写真5 Gさんのマッピング例

(2) 出身地による抽出・整理

住宅地図にマッピングしたのから、各ヒアリング対象者の出身地と思い出の場所の関係を整理すると、対象者が思い出すエピソードは出身地周辺のエリアに集中することが多かった。写真4,5は、特にその傾向が現れた2人のマッピング例である。

Sさんは上町に生まれ、小学校で下本町に引っ越した。幼少期の上町の記憶は上町周辺に見受けられた。下本町に引っ越してからは記憶のある場所が下本町を基点として古町、大正公園などその周辺部へと移動した。

Gさんは昭和30~50年の間ずっと田町で暮らしてきた。そのため田町についての証言が非常に多く見られ、内容も詳しいものであった。近隣の町の話は、町の雰囲気など、印象の話が多かった。

4. プロセスと住民の関わり

図-1より、【現地調査】の段階で調査・編集・企画・活用を同時並行で行った。現地作業が増え、【現地調査】の実施期間も19日間現地に滞在して研究を行った。これは現地住民の関心を集める要因の一つになったと考えられる。ヒアリング人数はのべ25名となり、1回あたり約1~3時間の調査を行った。また、同じ人に複数回ヒアリングを行うこともあった。

ヒアリングに関して、本研究ではヒアリング会場を作成し、そこで大多数のヒアリングを実施した。人通りの多い場所であるだけでなく、会場の作成段階から地元の方に協力を頂くことで、地元住民の方々の興味をひきつけになった。誰でも入れる環境にしていたため、ヒアリング会場に再訪問して追加情報を提供する人が現れることがあった。現在竹田外に住んでいる竹田出身者が訪れたり、ヒアリングの最中に地元の高校生が遊びに来て、高齢者と高校生が交流をする場面があった。

アウトプットに関して、マップ、報告書等、持ち運びが可能なものではなく、本研究では壁絵という、その場から動かせないものを作成した。調査内容が壁絵にそのまま反映されるので、新たな記憶を呼び覚ますきっかけになり、場所にまつわる情報を得られることが多かった。また、白地図に書き込んだため、思い出の場所の分布が明確に表れた。一度完成したら加筆・修正ができないという欠点があったが、地元住民の発案により側にノートを置くことで内容の加筆・修正を行えるようにした。

5. ヒアリング調査後の展開

(1) 寄合所「よろうえ」の設計

今回の研究調査で制作した壁絵を、向かいの店舗で、今後5年間で運営される地域の寄合所に設置することとなり、研究に併せて寄合所の設計も行った。現在は寄合所として、商店街の会議スペースや、地元高校生の自習部屋など、自主的な活用がなされている。



写真6 寄合所「よろうえ」内観

(2) 成果発表会

平成24年度の研究活動報告発表会を2013年3月26日に竹田市下本町通りで行った。川添研究室の取り組みの過程と、ヒアリング調査によって明らかになった内容を発表し、情報を共有した。

各通りの商店街によらず、老若男女の方々合わせておよそ100名が集まる会となった。写真-7のように、路上で発表することで多くの人に聞いてもらえるように努めた。発表後は「よろうえ」の内覧会も行い、寄合所や壁絵の存在を地元住民に認知して頂く機会となった。



写真-7 報告発表会の様子 (撮影：住宅建築/鈴木和宏)

6. おわりに

本論では、オーラルヒストリーの中で「まちづくりオーラル・ヒストリー」に着目し、そのプロセスを記録し、既往研究と比較した。本論の成果は以下の通りである。

- ・ヒアリング調査によって、場所や環境とそこでの人の活動の様子との関係の深いエピソードを整理し、傾向を考察した。
 - ・ヒアリング調査を通じて、昭和30～50年の竹田の姿を、壁絵という形にアウトプットした。壁絵を制作するだけでなく、様々な世代の地元住民と積極的に関わることで、高齢者の頭の中の情景を、他世代と共有することができた。
 - ・まちづくりオーラル・ヒストリーにおいて、調査だけでなく、その前後のプロセスでも積極的に協力を呼びかけることは、住民の関心度が高まり、非常に有効な手段であることがわかった。
- 今後の課題として、職業別や出身地別のまちの見方を調査することで、新しいまちの見方を発見できる可能性がある。
- 以上より、まちづくりオーラル・ヒストリーはまちづくりに関して今後も発展の可能性があると考えられる。

謝辞

様々な地元民を紹介して下さった市役所の方をはじめとして、ヒアリング調査だけでなく差し入れ等の手厚いご協力を頂いた竹田の皆様、心から感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 山崎義人, 後藤春彦, 村上佳代: 愛知県足助町におけるオーラルまちづくりヒストリーの試み, 建築学会論文集, No.6083, pp.631-632, 2000
- 2) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラル・ヒストリー, pp.83-96, 岩波書店, 2005
- 3) 金井雄太, 福井恒明: 近世竹田における城下町設計の論理, 景観・デザイン研究講演集, No.6, pp.354-362, 2010
- 4) 竹田市役所: 竹蔵, pp.120-134, 朝日印刷, 2004